



TITLE:

謎と力 エリザベス朝悲劇の成立と変容(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

三盃, 隆一

CITATION:

三盃, 隆一. 謎と力 エリザベス朝悲劇の成立と変容. 京都大学, 2019, 博士(文学)

ISSUE DATE:

2019-11-25

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.r13283>

RIGHT:

京都大学	博士（文学）	氏名	三盃 隆一
論文題目	謎と力 エリザベス朝悲劇の成立と変容		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>専属劇団を持つイングランド最初の常設劇場が、当時のロンドン郊外に建設されたのはエリザベス朝期（1558-1603年）の1576年であった。これ以降のエリザベス朝と、それに続くジェイムズ朝（1603-25年）は、主にロンドンにおいて演劇活動が活発に行われ、ウィリアム・シェイクスピアを中心として、数多くの劇作家たちが、今日に至るまで読まれ、上演されている戯曲を執筆した時代である。本論文は、この、半世紀以上にわたる、英国演劇の興隆期に書かれた戯曲、中でも特に悲劇に焦点を当て、その成立と変容を探究する試みである。全体を構成する六部、十八章は、以下の通りとなっている。</p> <p>第一部 「エリザベス朝悲劇の成立と変容」―その謎解きの前に</p> <p>第一部は三章からなっている。第一章では、本研究の基本方針として、シェイクスピアと同時代の劇作家の悲劇作品を、どこが悲劇なのか、なぜ悲劇なのかといった問題意識を念頭に置きながら比較、検討することで、全体の副題ともなっている「エリザベス朝悲劇の成立と変容」について考察するという目的を示し、あわせて、悲劇における「聖なる（sacred）身体」と「性なる（sexual）身体」のせめぎ合いに焦点が当てられることを述べる。さらにここでは、戯曲の言葉の分析を研究の基本方針とすることを提示する。続く第二章、第三章では、悲劇自体の考察の背景となる、シェイクスピアの生涯、ならびに、その時代について、そこに見られる謎を適宜指摘しながら包括的に記述する。</p> <p>第二部 キッドとマーロウの悲劇作品</p> <p>第二部では、シェイクスピアに先行する最も重要なエリザベス朝悲劇作家とみなされる、トマス・キッドとクリストファー・マーロウの二人の作品を考察する。第一章では、キッドの代表作であり、後世に大きな影響を与えた『スペインの悲劇』を取り上げる。この劇では、後に『ハムレット』で扱われる復讐の主題と死者との対話の二点に着目するが、本章では、この劇を上記の「聖なる身体」の問題意識の中で検討し、劇空間が中世的世界観を基盤として成立していることを論じる。その根拠となるのが、そこに見られる「身体」の象徴性を信じる世界観と、劇中で殺害されるホレイショーの遺体を記号化された「聖なる身体」として見る視点の一貫性である。</p> <p>第二章においては、マーロウの『フォースタス博士の悲劇』を取り上げる。「超越」の欲望にとりつかれ、魔術を選択し自ら神になることで永遠の命の獲得を目指す主人公の魂の分裂と葛藤を、魔術の書と聖書、エロスとアガペーの分裂や葛藤と重ね</p>			

ることで、この登場人物の身体の「物語」の中に宗教改革とルネサンスの激突の「歴史」を見出し、そこにシェイクスピア悲劇の下地を見ると論じる。

第三部 シェイクスピアの悲劇作品

本論文の中心となる第三部では、シェイクスピアの悲劇六作品のそれぞれに各一章を充て、第二部で扱われた諸問題をシェイクスピアがいかに変容させているかを論じる。第一章においては、宗教改革後のイングランドという文脈において、亡霊としての父親の「聖なる身体」と生身の母親の「性なる身体」それぞれと主人公との関係に焦点を当て、マニエリスムの劇空間において身体の本質的意味を正面から問うた劇として『ハムレット』を評価する。引き続き第二章から第四章では、『オセロー』、『リア王』、『マクベス』を考察の対象とする。『オセロー』においては、主人公の妻殺しを「供犠」として解釈することで、デズデモーナという登場人物における「聖なる身体」と「性なる身体」の相克を論じ、ここにシェイクスピア悲劇特有のオクシモロンの世界が展開されていると結論付ける。『リア王』では主人公の三人の娘達の内、ゴネリルとリーガンに「性なる身体」の否定的な側面が体现されている一方、コーディリアの死すべき身体にC・L・バーバーの言う「人間－内の－聖」を見出す。『マクベス』では、「罪と罰」といった主題を中心に、この劇に通底するオクシモロンの呪縛を論じ、第二部で検討した劇との比較において、その独自性、近代性を提示する。

後半二章では、『アントニーとクレオパトラ』、『コリオレイナス』を、前半で扱った四悲劇と比較しながら、その悲劇としての異質性を検討し、これら二作品を、和解と諦念の世界へ向かって一步踏み出した、悲喜劇への架け橋にあたるものと位置付ける。

第四部 シェイクスピアの「ロマンス劇」―「悲劇」からの脱出

全二章からなる第四部では、シェイクスピアがその劇作家としての経歴の最後に書いたロマンス劇の内、『ペリクリーズ』、『冬物語』、『テンペスト』を取り上げ、第三部で扱われた「人間－内の－聖」という主題を軸に、これらの劇を、同じく第三部の後半で既に見られた、悲劇から悲喜劇への変容の到達点と結論付ける。

第五部 ウェブスター、ミドルトン、ターナーの悲劇作品

第五部では、シェイクスピア以降の劇作家による四作品を検討する。ここで焦点が当てられるのが、これらに一貫して見られる「獣性としての欲望」という主題である。第一章ではジョン・ウェブスターの『白い悪魔』、『モルフィ公爵夫人』を取り上げ、第二章の前半で扱うトマス・ミドルトンとウィリアム・ロウリーによる『チェインジリング』と共に、これらの三悲劇に共通する女性主人公の身体表象の特性を考察する。ここでは、家父長制社会の中で魔女や娼婦として表象される彼女たちの「性なる身体」が、特に第二部で扱われた悲劇に見られた、「聖なる身体」の対極に位置

すると論じ、この二種類の身体の究極的な分裂を示していると指摘する。さらに、この分裂に伴って、セクシュアリティやフェミニニティの欲望にとりつかれた身体（あるいは主体）に対する不安や嫌悪が主題となっていると主張する。また、第二章後半で焦点を当てるシ ril・ターナー（またはミドルトン）作『復讐者の悲劇』に関しては復讐と正義という、やはり本論文でも繰り返し検討されている問題を、復讐者が悪党に変容するこの劇における「獣性としての欲望」との関係で考察し、この主題を徹底して描き切った「戯画的風刺の世界」に到達した作品と位置付ける。

第六部 悲劇論覚書

本論文を締めくくる第六部では、四人のエリザベス朝、ジェイムズ朝演劇研究者の悲劇論を取り上げ、ヘーゲルからデリダに至る一般的な悲劇論と彼らの研究の関係を解説しながら、エリザベス朝悲劇を、「聖なる身体」の象徴性を信じる中世的世界観と、「性なる身体」、さらには「政なる身体」の破壊的魅力に取り憑かれた近代的世界観のせめぎ合いの世界として結論付ける。

(論文審査の結果の要旨)

本論文が扱う、エリザベス朝、ジェイムズ朝演劇の研究には、国内外で長い伝統があり、研究書や論文も数多く発表されているが、本論文の際立った特徴はその対象とする期間の長さと作品の数にある。この時代の最大の劇作家であるウィリアム・シェイクスピアを中心に据えながら、シェイクスピアに先行する、あるいは、その後に活躍した劇作家達の作品をあわせて扱い、シェイクスピア作品においても、主要な悲劇だけでなく、通常は悲劇とは考えられていない作品群をも検討することによって、悲劇というジャンルの全体像を考察することを試みている。本論文は全体で六部十八章からなる、九百頁を超える力作で、扱われている戯曲は十五作品にのぼり、充実した脚注と共に、論者の長年にわたる研鑽の成果が十分に発揮されたものとなっている。

本論文において特に評価すべき点は、それぞれの劇の台詞の分析、批評史における意義や問題点の検討といった微視的な議論と、ジャンル全体の成立と変容という巨視的な議論の両方が組み合わされている点である。前者に関しては、戯曲本文の精読と、台詞の重視という研究姿勢が一貫して見られる。これは、この分野の最も先鋭な批評が、上演、映画化、さらには消費文化における商品化といった、テキストの現代的な意義の探求に傾きがちな今日、論者自身認めているように、幾分古いのかもしれないが、この姿勢が文学研究の基本であることに変わりはなく、その価値が失われるものではない。後者に関しては、対象となる時代の歴史的、文化的文脈の記述や、本論文の基本的な研究方法を決定する上で重要な批評家の仕事に関する解説も充実しており、論者の周到な準備がうかがえるものとなっている。

この、微視的な議論と巨視的な議論の並立については、復讐悲劇というサブ・ジャンルを論じた各章が好例としてあげられる。エリザベス朝悲劇の最初の傑作とされるトマス・キッドの『スペインの悲劇』、シェイクスピアの『ハムレット』、さらにジェイムズ朝期のジョン・ウェブスターによる『白い悪魔』、シリル・ターナー（またはトマス・ミドルトン）の『復讐者の悲劇』を論じた各章においては、それぞれに特徴的な復讐の様相を、本論文の議論の軸となる「聖なる身体」と「性なる身体」の関係に焦点を当てながら、戯曲本文の精読と先行研究の検討に基づいて詳細に論じている。これらの各章を通観すると、そこに見られる相違点から、この時代の悲劇における復讐と正義の関係の変容が明確に理解できるようになっている。

とは言え、本論文の中核をなすのは、シェイクスピア劇を扱った第三部、第四部である。第三部の前半は、シェイクスピアのいわゆる四大悲劇と称される『ハムレット』、『オセロー』、『リア王』、『マクベス』を扱い、第二部で検討された先行する劇作家達の悲劇の影響を脱し、シェイクスピア独自の悲劇へと変化した経過を辿っている。後半では、その後に書かれた『アントニーとクレオパトラ』と『コリオレイナス』にシェイクスピア以降に流行した悲喜劇と呼ばれるジャンルへの架け橋としての性格を見出している。さらに、第四部において、通例悲劇とは別ジャンルと考えら

れているロマンス劇との関係を指摘している点は特に注目に値する。論者は、ロマンス劇を、悲劇の多様な可能性を十分に探究したシェイクスピアが、経歴の最後に悲劇からの脱出を試みた作品群と位置付けて考察し、この劇作家による、悲劇というジャンルのさらなる変容を論じており、本論文の独自性を見ることができる。

本論文は上記の点で評価されるものの、不備がないわけではない。特に、本論文の通時的研究としての性格を考えるならば、シェイクスピアの『タイタス・アンドロニカス』、『ジュリアス・シーザー』といった、やはり、復讐、亡霊といった主題を扱い、本論文の検討対象となっている戯曲と十分比較できうる悲劇について議論がない点は問題となるであろう。また、論文の本体となる各章では、プロットと登場人物の紹介に始まる同じ構成の記述が繰り返され、単調という印象を与えていることは否めない。あわせて、先行研究の検討においてより周到な注意が望まれる箇所もある。また、たとえば、『テンペスト』についての考察においては、プロットが進行する孤島という空間の意味について詳細に論じている一方、やはり地理的な空間が劇の展開に大きな意味を持つ『オセロー』に関する議論ではこの点についての言及がないなど、議論に一貫性が欠けていると思われる箇所もある。

しかしながら、これらの問題点も、本論文の基本的な価値を大きく損なうものではない。記述の単調さについては、通読した場合には目につくものの、既に書物として刊行されている本論文の各章を読み、各悲劇について考える際にはさほど気にならないものであろう。また、本論文が論者の長年にわたる教育の実践に基づき、エリザベス朝悲劇に詳しくない読者にとっても有用な書物を目指して書かれたものであることを考慮に入れると、各章の丁寧な記述は、むしろ戯曲の理解を助けるガイドラインを提供するものと考えられる。議論の焦点が必ずしも統一されていない点も、本論文のような、長い期間に書かれた多数の戯曲の総合的な研究としては、各作品の多様性やこの時代の悲劇の豊かさを示し、ジャンルの変化の一側面を示唆するものと考えられることも可能である。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2019年9月9日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄に関して口頭試問を行った結果、合格と認めた。